

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	諫江傳記 : 雜録
Author(s)	温知学人
Citation	龍南會雜誌, 33 : 28 - 32
Issue date	1895-01-30
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/4513
Right	

電燈直ち發す、仕掛けられたる速度を以て、帶紙出で、同時に圓板回りて、受け紙に見事なる光景顯はれ、音聲までも、手に取る如く聞ゆるとき、視る人、餘程の變人が、又は頗ぶる氣六つかしき人に非ざるよりは快と叫ばざらんと欲するも得べからざるあり、

寛州友人に謂て曰く、エヂソンのキチトスコープ若し早く我國に到來せば、余は北京落城の實況を、砲聲と共に此器に藏めて來らんことを欲す」と、友人之を聞て笑せり、

諫江傳記

此篇の記事は、中嶋保久さくふ云ふ人、慶應三年卯五月下旬に、謄寫せるものに係はり、名けて諫江傳記と云ふ。去歲行軍して諫早に到りし時余中嶋氏に請ふて、此寫本を閲讀するを得たり今茲に之を抄録したるものゝ掲げて、讀者の一察に供す。篇中、畧さ記せる處は大平記的戰爭記事の如きものにて、餘り重要な部分にあらず、讀者之を諒せよ。

乙未歲一月中流

溫知學人識

抑諫家の御神祖龍造寺七郎左工門家晴公と申奉るは太職冠鎌足公の御廟裔肥の前州水ヶ江龍造寺鑑兼公の御嫡男龍造寺隆信公の御曾君あり（略）薩州竟に平均えて秀吉公御歸陣之上九州の諸侯へ各本領安堵の御敎書を賜り家晴公へは西郷純堯ただ前に薩摩征伐の催促は從はざるの故を以明地召上られ諫早を家晴公へ賜るの旨嚴命あり外に藤津郡小城郡杵嶋郡の内を加へて本地貳萬六千石御朱印の書で宛行れ御喜悅斜ならずとや此時家晴公へは筑後一國給るべし大國拜領の事故先例に任せ御禮金差上らるべきの由淺野殿より達せらる然れども俄に黃金百枚の調達出來がたく御請取相叶はず仍ち伊佐早を賜りたり

西郷左衛門太夫純堯は西郷石見守尙善其子肥前守純久の嫡男にて數代伊佐早を領せしも太職冠鎌足

公の後胤藤原姓にまて系圖正く已前隆信公の姫君を娶り龍造寺の縁者たり是に依て佐嘉に越るゝよ
於ては地行八千丁を分ち遣すべしと御舅君よりの招き度々に及ぶといへども曾て従はず夫より御中
不快にして御姫君御取戻の離別あり(略)

西郷家には羽翼と思ひま忠臣二人逐電し家中悉く力を落し穩みざる處に純堯不庭によつて領地沒
収し龍造寺七郎左衛門家晴へ下し賜るの間速に引渡されよとの嚴命あり爰に於て純堯山崎等が諫言
を思ひ後悔有といへ共甲斐なく一家中も膽を潰し俄に潮の湧く如く周章ふためき(略)城地打渡さる
べきや否使者を以訊問あるべしとて頓て使者を伊佐早へさし向られ政家公よりも御使者ありといへ
ども城打渡べくとの返答なま此上は一戰に及び御請取あるべしと屈竟の兵二千五百騎を引率し天正
十五年七月朔日佐嘉を發して多良路より討入給ふ(略)

斯くて家晴公輒く西郷を討て高城の本丸に入城し給ひ夫より領中を巡見ま所々の明屋敷を家中の面
々へ下し賜り早々妻子を引越安堵せよと仰有(略)

西郷氏は南高來に逃避したりま云ふ

叔諫早には如斯平治し逆心の者あるべき共思はぬ所よ未殘黨所々へ隠れ居村々の庄屋百姓等も數代
の厚恩を思ひ別して天祐寺の住持泰雲西郷舊恩深さに感じて無念止む時なく折から公肥後よ赴給ふ
由を聞叔ころ時節至れりと所々の殘兵を招て寺中に籠置島原へ志趣を通じ(略)西郷純門(純堯の弟
類)大將として家士數多船に取乘夜中に梅津半造江より上り陸路よりも馳加つて(略)此夜一揆の輩
所々を亂妨す(略)されば逆徒等本丸は乗取たりと雖も二の丸を攻潰事叶はず其夜は高城に退き翌日
は是非正林を切崩さんと軍評定時移り夜もしらくと明渡る(略)

天祐寺泰雲が催促に依て西郷の家士反逆し高城を乗返したる發端より家晴公への注進海陸櫓の齒を曳くが如し公肥後に在座て此由を聞召れ急き御歸陣御退治有べとて天正十五年十月二日御手勢千五百騎を引率し肥後を立て夜白人馬の息を繼せ次佐賀よりは御船に召れ同き四日の早且に諫軍へ御着陣正林の砦に御馬を入らる西郷勢此勢ひにおぢ恐れ一戦にも及ばず高城を明退只蜘蛛の子を散すが如く嶋原さして逃走る又半造江に繋置たる船に取乘て逃行者も多かりしかば君御下知ありて鳥渡伊豫早田五郎左衛門西山與左衛門高柳右工門船手の大將として三ッ嶋邊まで追て悉く討取(略)

偕も西郷一揆の輩公御武徳に依て一戦にも及ばず城を明て逃失ければ正林より本丸へ移らせられ大半安平ありと云といへ其村々の土民等逆臣に組せし者數多あるよと根を斷ずんば有るべからず逆密々に穿鑿させ何所の誰彼所の何某と面体恰好迄速に知たれば謀を廻さし此度上下安堵の悦びに大踊を催し段中の者へ見せらるよし時日を定めて相觸らる頓て其日にも成しおば東西南北の村々より雲霞の如く城下に群集し櫻の馬場脇芝原にて大踊始り見物す兼て智略の事なれば逆心の者一人に討手二人つゝ定置さ見物人に紛れ入其比の流行歌を踊袖の振さへ他生の縁と云事を相圖に一度に七十三人打取見せしめにとて悉く芝原へ獄門に送られたり其日見物ふ出ざる者扱又天祐寺泰雲は組せし小江村道廣寺の住持榮田村安祥寺の住持には討手を向られ其村々にて切害せらる(略)

かく叛ぜし者多かりしは、實に西郷氏の聲望ありし証據にして、後世まで「百姓振舞」なること行はれしは、即ち文中「土民等の逆臣に組せし者」を慰藉する爲なりしならん云。

斯して段中平治之御家臣残らず夫々に屋敷を賜り妻子を養ひ枕を高ふして軍勞を休め各君恩の厚さを感じる計なりかゝる處へ官府よりの御奉書到り西郷若し命を拒て異儀に及ばし明れば天正十六年の早春に大和中納言殿へ十万騎の勢を添御退治あるべしとの御事あり仍而軍事の荒まし返翰に認ら

れ全平治の赴言上に及ばる秀吉公聞召れ今様の手入家晴一手に取て挫し事武勇の至りと御感有て重て伊佐早二万二千五百二石五斗(最初は二万六千石と有り如何御家系には二萬二千五百石五斗と在)の地を賜るの旨御朱印の書目を経て到着有難しと御頂戴萬々歳に傳りて目出度御家と治れり

隆信公より家晴公へ使者を以て此度嶋原への儀是非御同陣有べしと度々仰越ると雖も家晴公は筑後御守衛御迎被成がたく仍て御返答には此度嶋原への御進發を相計り薩州勢裏廻りして筑後肥前へ押寄る事もや有んと仰越れし處果して君御明察の如く隆信公御戰死を見計ひ薩州勢三萬騎筑後南の關に寄せ來り頗る難儀に及せらる其節(略)惣して公平生諸士を憐み給ひ常より御物語よも家臣は皆武勇の用より家晴戰場に向て一人として後れを取者なし憶病あるは憶する様子するに依て也然といへども數度の軍に臣數多討死せる事不便の至り生残りたる者も又翌をも知ず戰に臨んでは我等が爲に一命を塵芥よりも輕する事あるに聊の誤に料しめんと致事以の外不仁の儀也と仰有し由

足輕松下小右工門といへる武道の心深き者あり(略)之を召出され此間兵法の勝負に付異論に及び鬱憤有由慥に聞包す申せと仰有松下有の儘を申上れば憤は去事ながら何事も我等に對し堪忍せよ褒美として白銀三包被下とて御硯より取出し手自是を給はり急度持歸一門の者共へ酒を振舞へど仰有が有難と頂戴して意恨更に残らず其後の御物語に此間下直の者を買取たりと何を御買被成しやと申上ればされば用に立つ武士三人銀三包に置置たりと御物笑ひ有たる由(略)

於彼國(高麗)家晴公御武功舉て筭へからず加藤肥後守清正公是を感じて御歸陣の後肥後に相越れ度旨種々御招有といへども不叶直に書翰を以是非御歸陣の後御越あるよふ左あらば肥後國王名郡十五石の處指進すべまど數通の御文書あれ共公の御返事には辱と計にて御領掌なく清正公も此上はと

て止をぬ

西郷家怪異の説、太鮎の辨、大龜の由來、西郷意情の説等あれども信偽辨じ難き故、茲には省きつ。

茂圖公御參府の節防州邊の宿に長州萩の家中に諫早氏の宿札に藤の丸の紋の幕を打居たる人あり公不審に思召れ何れの譯なるや家筋聞合置御下の節申上候様御本陣亭主へ仰付置れたるに御下國の節悉く聞合せ向方より書付を渡されたる由にて差上るに右萩の家中に諫早氏を名乗る譯は七郎左衛門様武雄より萩に御出御一生御客分にて御座なされ其子孫萩より五百石の知行を給り當時は番頭よて勤居候由偕全禰様竜造寺を改諫早を御名乗なされたる時彼の方も諫早に改藤の丸の御紋に御替あされたる時又同く紋を替たる由の書附に此御方同様の系圖の一卷を副先年は何れの譯有之たるや於爾今は何の意趣意根も無之何卒年始一度の御取合成共致度由望之赴御本陣より申上たるみ依て御歸國の上御内々請役所へ御沙汰あされまかば先年義絶の譯も相知れず今更御取會はいらざる御事と申事にて夫ありにして差置またる由

(眞孝公御嫡豐前守茂敬公)嶋原へ凶賊一揆を起ま男女五萬人原の古城を取立て引籠江戸より討手を差下され且九州の大名取巻責るといへども落城致ちず(略)公一番に御手勢三千人を引て御出張遊され上使御差圖を以て松山の出丸を御責取あされ諸手は見物致居たる由此時二の丸より打出す鉄砲の玉雨霰の如面を向くべくやうもあさに速に御乗取天晴ある事共也本朝にて松山豊前と稱するは此御軍功の御美名なり

茂敬公御代異船來着の節直に公深堀小鹿倉へ御出張あり